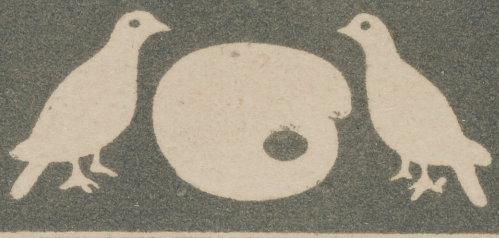


孝子

三世第

日本水彩畫會々友假規定

一本會は水彩畫の發達及び普及を目的とす

一本會の趣旨を贊するものは何人と雖も會友となる事を得

一會友は自己製作品の批評を受くることを得べし

批評は一ヶ月一回三枚迄○作品には其裏面若くは別紙に寫生の時日、時間、其日の晴曇其他必要の説明及自己の姓名を明記すべし、是等の記入なきものは批評せず○作品は板紙に挿みて送るべし卷きて送るものは其儘返送すべし○毎月二十日迄に送らるれば翌月十月迄に返送すべし○作品と同時に相當返送料を送るべし、但一時に數回分納附するも妨なし

一會友の作品は鑑別の上本會展覽會に出品することを許す

一會友には本會の出版物を實費にて頒つべく其他本會と直接關係ある出版物の類は割引價格を以て頒つべし

一會友にして本會研究所又は講習會等へ加入する時は特別の待遇を與ふべし

一會友には一年數回本會特約彩料舗の物品代價割引券を贈るべし

一會友の望により一枚につき金五圓以上の擔保金を納むる時は本會幹部諸員の肉筆水彩畫を貸與すべし

貸與規限は二週間○圖柄及筆者を指定する事を得ず○遞送其他の實費として一回につき金參拾錢を前納すべし○擔保金は繪畫歸着後二週間以内に返戻すべし○貸與せし繪畫に損傷紛失等ありし時は擔保金を沒收し價格に不足を生ぜし時は追徵すべし○貸與請求は毎月二十日より三十日迄とす

一會友たらんとする者は入會證書、履歴書に記名料金壹圓を添えて申込むべし

入會證の用紙は半紙に限る○文面は適宜なれども必ず捺印を要す○履歴書には住所身分職業姓名年齡及學歴等を明記すべし

一會友は當分會費を要せず

一退會せんとするものは其理由を明記せし届書を出すべし但記名料等は返却せず

一會友は雜誌『みづゑ』直接購讀者たるべく『みづゑ』の購讀を中止せし時は退會と見做す

一會友徽章は實費金四十錢を以て頒つべし

一會友は各自技術の進歩を努むると同時に、品性を高むる事を心掛くべし

本會は溫良なる紳士淑女の集合に成れる品格ある一團體として社會に立たんと欲す、故に會友は技術の進歩よりも寧ろ品性の修養に重きを置かれたし

一會友に關する一切の事務は、東京小石川區關口駒井町大下藤次郎方に於て取扱ふ○會友よりの郵便物類も總て同所宛たるべし

以上

明治四十年十一月

日本水彩畫會

みづゑ 第三十三要目

巴里近郊（水彩畫原色版）……故 淺井 忠
靜物寫生の話〔二〕……大下藤次郎
水彩畫家と油繪……石川欽一郎
寒國の美……丸山晩霞
藝術小言……畔川生
港の月（着彩線畫石版）……住田良藏
松風……汀鷗
ピーター、デ、ウイント〔三〕……青人
竹に就て……河合新藏
ふみから……T、O、生
其他通信……寄書……紹介……問答……讀者の領分……寫眞版數葉

前號要目

○甲州釜無川（水彩畫原色版）……大下藤次郎○再び松に就て……丸山晩霞○イラストレーション……戸張孤雁○靜物寫生の話〔一〕……大下藤次郎○社頭の松（圖案畫石版）……鈴木錠吉○新玉の御祝儀……石川欽一郎○繪日記……汀鷗○ふみから……T、O、生○中學教員檢定本試驗……紫舟生其他

△口繪巴里の近郊……田中寫眞製版所
△港の月……山田石版所
△寫眞綱目版……秀英舍第一工場

PWO

OW4

みづゑ　第三十三
明治四十一年二月三日發兌

靜物寫生の話〔二〕

大下藤次郎

△寫生すべき材料が小なるものであつたら箱か机の上に載せてもよいが、座つて畫く場合には疊の上其儘でも差支ない、併し畫者の眼と被寫物とは二十度以内の角度を保つてゐなければならぬ、被寫物と眼と平行してもいけぬがあまり近く見下すやうでも困る、但し鴨居に吊した鳥などを寫す場合のほか見上げて畫く事は殆どない。

△材料の位置は最も注意されたい、靜物畫の繪畫としての價値は重に其配置の如何にあるのであるから、なるべく單調にならぬやうにせねばならぬ。

△若し輪廓のみを稽古するための鉛筆畫であつたら、其材料の線を面白味のあるやうに配列せねばならぬ、線が同じ方向に並行するのも避けたい、規則正しく無趣味になるのも避けたい、假りに一册の書籍を寫すとするに、正しく正面に置かずに稍々角度を造つて斜めに見れば、線に變化が起つて見た處がよい。

△更に直線のみの書籍に配するに、圓いインキ壺を置たなら、物の大小の取合はせと、曲直線の對照とで面白味が增す、此場合にインキ壺に代ふるにマツチ箱を以てしたら、大小の取合はせはよいが線の上で趣きを失ふ。

△若し三個の林檎を寫す場合に、其三個を並べたのみではいけぬ、中央のものと左右のものとの隔りが同じではいけぬ、二個を近づけ一個をやゝ遠く離すと位置がよくなる、そして其三個を同一線上に置かず、其内の一個又は二個を前なり後へなり少しく動かすと位置はます〳〵多趣味になる。

△三個の林檎は皆曲線である、其配置を直線的にするのみでなく、背景(バツク)の布地(きれ)に襞を作り、又は臺か机の上に載せて其物の直線の一部分を示す時は、曲直線の配合も出來るのである、他の物を寫すにもすべてこの例によつて工風されたい。

△寫すべきものが複雜なら、背景はなるべく、簡單にする、寫すべきものが單調なら、背景を工風して賑やにするもよい。

△濃淡の調子を稽古する墨繪、即ち鉛筆畫又は一色畫で寫生する時には、被寫物の線に工風がいるのみでなく、明暗の上に面白味をつければならぬ、排列されたる物の注視點に強き影を作つて圖を緊縮せしむるが如きは最も必要な手段である。

△次に彩色する場合には、線及ひ明暗の整へるのみでなく、色彩の上に多大の注意が必要である、色の配置が亂雜であつては繪をなさぬ、被寫物のうちで明るく鮮やかな色をなるべく注視點に持つてゆくやうにする、そして背景や下敷は出來るだけ邪魔にならぬ目立たぬ、色を用ひるやうにする、寒色熱色などの應用は勿論である。

△原色(黃、赤、青)若くは原色に近き複色(橙、綠、紫)は、靜物畫には限らぬがタトエ一點だけでも何處かにあつて欲しい、なるべくは注視點に近くあつて欲しい、何の活きたる色もなき冬の淋しき田圃の道を、赤き帶をしめた田舍娘が一人居つたなら、其赤き色のために全景に活氣を與へるが如く、總ての繪畫には何處かに此生々しき美しき色が僅かでもあつて欲しい、イヤに高尙がつて澁い色〳〵と、皺だらけの老人の集會のやうな血の氣のない繪は有難くない、但時代のために自然的に色の沈んた古畫の如きは別問題である。

△併し此若々しき色は、其部分の尠ない程貴いのである、無暗に澤山赤や青を用ひられては困る、彩色畫の上に反對色の應用は最も必要の事ではあるが、林檎の紅きに對するつもりでケバ〳〵しき綠色の布の下敷を用ひたのを見たが、これ等は論外である。

水彩畫家と油畫

石川欽一郎

水彩畫を專門とするものは其水彩畫さへ研究すれば充分であるのみならず、之れが即ち目的であれば油畫の如き我專門以外のものは側に有つても顧みる必要は無いと云ふ人も在るかも知れぬが、已に洋畫家にして日本畫を研究し又た日本畫家にして洋畫を試る人さへ有ると云ふ此頃、恰かも水彩畫を女房に例ふれば油畫は亭主に當るべき深い因緣のある此夫婦の技術は、其何れを專門と爲さんに限らず雙方研究して益々一方の專門に奥儀を極むるを得べしと云ふことは、之れは僕の說で、未だ確定したと云ふのでは無いから不服の人が有つたら直ぐに取消すことゝして、先づそれまで引續き說を述べて見るに、一體は油畫と云はず、鉛筆畫は勿論、ペン畫で有ろうが擦筆畫は申すに及ばず、**コンテー**、**パステル**、**クレオン**、毛筆、其外**エツチング**に至るまで苟くも畫の部類に入るべきものは皆水彩畫研究の材料として大に研究すべきであると云ひたいので、今其中の亭主油畫だけに就て云へば、色を出す上に於て寫生に之れ程便利で容易で似せ易くて色彩の性質用途を研究するに適したるは無かるべく、之れで充分色を見なれ用ゐなれ使ひなれて、其研究の効を其儘水彩畫に適用せんか、**ターナー**先生をして其名の如く驚轉せしめ、**デウイント**先生に同じくづん、と尻餅をつかしむる技を爲すに何んの疑ひあるべき、要するに水彩畫は油畫よりも六かしいと云ふと、今度は油畫專門家の方から苦情が出るだろうから其時は直ぐ取消すことゝ斷つて置いて、それまでは水彩畫の六かしいことを述べて見るに、已に多少水彩畫を味つた人には六かしいことが能く分る、油畫では樂に出來る處が水彩畫では六かしく人の知ら無い困難がある、それ故に油畫で試みに種々色や調子を修正し充分研究して此處だと云ふ所を得心して之れを水彩畫にて現はしたらば如何、餘程結構なものが出來るに違ひない、又た此方法で水彩畫を作る畫家も西洋にあると云ふことは豫て聞く處であるから、油畫は水彩畫の敵でなく又た油畫をかいたからとて水彩畫を侮辱したものでない、否大に我領土

を擴げたようなもので、水彩畫家が油畫を占領し此處に一つの植民地を開いたようなものであれば、油畫を試みんとする水彩畫家の殖へるは大に賀すべきことならずや、水彩畫の短所即ち六かしい處と云ふのは色を強くだすに適せぬことゝ、ゴム靴同樣直しのきかぬことである、之れは油畫に於ては何んでもないお茶の粉なり、また水彩畫では六かしいとは云ふものゝ出來ないことは無い、名人になれば油畫よりも調つたる水彩畫がすら〳〵とかけると云ふも腕次第研究次第なり、我は水彩畫がすきで興味がある、趣味が我々に向く、それ故自分も畫けば人にも勸める、併し油畫にけちを付けるのではないのみならず大に之れを敬し援助を求めるのである、水彩畫が日本ならば油畫は英國で共に同盟提携して道を進まんとするのであるが、日本人は矢張りどこまでも日本人である如く我本領たる水彩畫の爲めには死力を盡して奮鬪するのである、更らでも有力なる水彩畫が油畫と同盟して我本土の安全開展を計るに於ては天下無敵なり、水彩畫の國家萬歲なり、水彩畫には油畫を共に研究して大に得る處あるべく、又た水彩畫專門家として決して恥かしからぬ將た我主義本領に反せざることなるを再び繰返へして終を告ぐ。

寒國の美

丸山晩霞

雪

余が故國にありしとき、二月の初旬頃と覺ゆ、梅は已に幽香を送りて澤の面の福壽草は黃金を點じぬ花香を封じこめたる優しき音信は南の友より來たれり、その頃吾寒國なる信濃にありては、四面皆白皚々たる雪を纏ふて寒威肌をつん裂き、南國の人々には想像だに及ばぬ程である、されど吾寒國の家庭に於ては、この季節程樂しきはなかるべしと思ふ、如何なる賤が茅屋に至るまで冬構ひは完全に調へ、爐邊暖かに一家團欒の快樂を恣にし、無邪氣なる物語りに雪の夜を暖かく更かす事もある、一ヶ年に於ける寒國のパラダイスは冬にありて、自然の美又冬を俟ちて發揮さるゝのである。惟ふに暖國の美又夏時にありてその特長

を認め得らるゝのであらふ。

今余は寒國の美を說くに冬を以てす、先づ最初に雪の所感を述ぶ。淸きものゝ譬にも雪月花といふて、雪程淸淨なるものは他に無からんと思ふ、されば雪は古來品題に上り、詩人は歌ひ畫士は描く、畫として特筆すべきものはその淸き色彩にある、雪は白なり、然も純白にして色にあらず、强て色といはば神の色ともいふ可きか、繪畫に現はるゝ雪の色は、光線に觸れて現はるゝ白の濁りたる色である。

變化窮りなき自然界が、皓々たる白雪を纏ふと、所謂銀世界を呈す、これが光線によりて濃淡を現はす、その濃淡が即ち雪の色である。黎明の頃曙の空に配したる雪の山は、最初暗紫色、次に紫、漸く明なるに從つて紫を含みし暗靑色となる、それに反對する即ち東方に面する雪の山は、黎明の頃は紫色、次に紅勝ちの鮮紫、漸く明になりて鮮紅を呈し、黃又は橙紅をも現はし、時には黃綠色を呈する事もある。雪の蔭又は遠きものは靑なり、これに太陽の熱色黃赤紅の映じて、間色の紫橙綠を現はすのである、日光の映じて色彩を放つ美感は夕よりも朝、午後よりも午前の方がよい。眞晝にありて日光の直射するとき、その蔭又は樹木等の影がその上に投じたるときの色は紫色にして、陽部は黃を含む、陽部の黃味いよ〳〵强きときは蔭はいよ〳〵深紫色となる。曇天の雪は概れ靑く、蔭と遠きものは靑灰色時に紫を含む事あり。先づ大體に於て上述の如くなるも、畫の美觀は調子を得るにあり、如何なる色彩を用ゆるも調子だに誤らざれば、感じは充分に現はすことが出來る。

しと〳〵と雪の降りつゝあるときの趣きは平穩のもので、濃霧の鎖した樣の感がある、一二丁の先にある家も森にも距離の現はれて、平素見馴れた場所も目新しく感じ、特種の趣が含まるゝのである。

吹雪の折又は强烈なる嵐の吹き荒びて峰の雪、梢の雪、谷の雪等一齊に卷き上げる時は壯烈の感が起り、冬の荒神(あらがみ)が猛り狂ふのでばあるまいかと思はるゝ、これ等の趣はあまりに活動が烈しいから郊外にて寫生する事は出來ない、單にスケツチブツクに鉛筆にて描く位で、この間の趣きを充分に記憶して想像にて描

くのである。雪の形態といふたら、何れも六といふ類で出來た花の樣なもので、畫としては說明圖の如く趣味が無い、模樣畫等には好材料である。畫としての雪の形態を說いたなら、大雪に於て見らるゝのである、自然界の凡てを埋めて、この下に八百屋ありといふ標札を建てる程になると、家も小山も森も樹も綿帽子着たらんやうになりて、それが皆美しい曲線にて出來て居る。それから鵝毛に似て飛び散亂するもの、綿をちぎつて拋つ如きもの、又は春の花の散るが如きものは繪に現はすべき形態である。

大雪の降り積りたるあとの晴天程心地よきものは無い、日光は雪を蒸して暖かく、屋根の雪は融けて擔頭の點滴宛然夏の雨の降りしきる如く、日沒頃より寒威加はりて、これが俄に氷結して垂氷となり、長きものは地に着きて氷柱となり、頗る奇觀を呈するのである。

雪の降りつゝある夜程靜なものは無い、月夜にありてこの間の眺めは趣味頗る深く、朧の月光は雪の白と相俟ちて煙るが如く霧の如く、深き灰色には少しく暖かき色含まれ、二三本の立木にも奧あるが如くに感じらるゝのである。雪の降り積りたる月明の夜も靜穩のものにて、皓々たる月光は皚々たる雪に映じても凄きまでに明らけく、壯美の感が起る。暗夜星光に於ける雪の美又壯美を極むるのである。

裸樹又は針葉樹等に降りかゝりたる美は、綿着なる如き大雪よりも紛粉たる淡雪の方がよい、時ならぬ櫻花かと見違ふもこの景である、更に旭のこれに映じてきらめくの美は何ともいふ事が出來ない。

散布したる如き淡雪の面に印したる足跡は、雪の文字雪の繪畫とも見る可く、二の字二の字の下駄の跡、梅の花かと思はるゝ猫の足跡は繪畫として好品題である。

鵝毛の如き春の雪が紛粉舞ひ來たりて、道行く乙女の前髪にかゝるも又捨て難き品題である。

小笠原に航する前夜認む

藝術小言

畔川生

此所論は敢て斬新なるものでもなければ悉く獨創の意見でもないがある一部の讀者の爲めにも
と思ふて書てみた

■惡く云ふと人間は惰力の奴隷となるものである、人世幾多の勞苦と鬪ひ紛亂錯綜とした周圍の煩累に惰力の奴隷となつた反動として玆に慰安を求める、又ある程度までは、人間は娛樂なるものがなくては生存することは出來ぬらしい、窮乏や苦鬪やの位置にあつて日々消耗しつゝある意氣を或る慰籍によつて復活しつゝある。

■何物かその慰安となるべきものぞ、或は宗教と云ひ或は道德と云ふであらう曰く何曰く何と數へ立つたら限りはない、又墮落に近い或は墮落とも云ふべき慰安の得かたがたくさんあるがそれは人各々見地人格の相違高低によつて分るゝであらう。

■玆に藝術といふものがある、藝術は人間に慰安娛樂を與へる道具としてのみ有るものとは云へないが、この高い慰安娛樂を得る一種の手段としてある人は藝術なるものを尊重し或は之に携はるのである。現代の人として藝術の趣味位ひは解するものに是非ならなくてはならぬ。

■我々は自然といふ玄妙不可思議なる中に生を稟けて存在してゐる、我々も自然の子である、自然を尊重し自然を愛護すべきは當然のことである、有學の士も無學の輩と雖も決して此自然の庇護を蒙らなくては一日も生存することは出來ぬ、科學者といふものがある此自然なるものを多方面から研究して智識と利益とを得んとしつゝある、藝術家なるものがある藝術家もまた到底自然を離れて存すべきところのものでない、然し科學者と藝術家との目的と手段は絕對に懸隔したものである、つまり科學は抽象的である理義一方である概念と所屬と學系と總括との研究審理である、之に反して藝術は具象的に其生命を表は

す處のものである趣味と慰藉である人間の享樂である世道人心の美化である、兩者の目的階段が如斯相違してゐるにも拘らず兩者其決して自然を度外視することは絶對に出來ぬ。

■藝術家は自然のあるものに接觸して自然の美に憧がるゝのみでは滿足してゐない、美術家は丹青の技に憑へて繪畫なるものを作る、文學者は一種の記號を以て感想を述べる、或は音樂に彫刻に劇に藝術家のする仕事はたくさんある。

■更らに換言すると藝術のあるものは人類によつて作られたる第二の自然であるといふてよい、人間といふ高い貴いあるものゝ理想と感興とを發露して更らに自然を離れて茲に完美なるあるものを表し得んとするものである。

■自然は奥妙幽玄にして到底人類の企及するところでない、素より人間も自然の一部分である、故に吾々は自然を憧憬し自然を尊重し之を愛惜するけれども是と同時に人間の手によつて作られたる第二の自然卽藝術なるものを尊重愛惜するのである、藝術家をして云はしむると自然と藝術との中間にあるものが藝術家であるといふてよい、自然は父の如く藝術は母の如し此二者の間に生れたるものが藝術家といふ一子である。

■然し藝術は自然の模倣じやない、徹頭徹尾自然を模倣するのではそれは自然の反覆である、自然の反覆が藝術の目的であつたら藝術程つまらぬ物はない。

■或は模倣といふ語に語弊があるかもしれんが兎に角前述の通り自然を度外視することは勿論出來ぬ、けれども藝術は人間の理想的懇望の發揮であるといふことを忘れてはならぬ、藝術は高いものである。

■このうるはしい高い藝術に携はる處の趣味感想は如何に人の心裡に活動し、意識を支配し、是によつて高雅幽麗なる品性を養ひ得ることであらう、かゝる性情があつてこそ人間も高しとするのだ、此高雅なる趣味を一口に美的趣味といふ。

■美學の術語として美といふ語に就て云ふことがある、これは普通に云ふところの美はしいとは大ぬに違ふ、一口に云ふと美は客觀を享受したる主觀と相俟つて初めて成立する處の意識である、即ちある一花卉の畫がある美くしい性質を存有してゐる、その性質の存有が主觀をしてよく美を感ぜしむるものそれが美である、此間に得たる想像を又美的假象と名けてある。

■此客觀と主觀との媒介をなすものに五官といふものがある、即ち視、聽、味、嗅、觸、である、此等の五官より得たる藝術を官能藝術といふ、此內視、聽の二者を高級官能に屬するものとし、味、嗅、觸の三者を低級官能に屬するものとする、彫塑繪畫、音樂、等皆此官能藝術である。

今一つは五官の機能を借らずして空想力に想化して藝術の理想を得ることが出來るものがある、これを空想藝術といふ、抒情叙事文、叙情叙事詩、戲曲等一般文學の名稱範圍にあるもの等のそれ等を云ふ。

■今我々が此等美なる感想に幾多の要素がある、即優美、壯美、悲壯美、滑稽美、等である。

■人が美を享受するには安靜の位置に居なくてはならぬことを承知してなくてはならぬ、假りに道に我々が猛獸に會ふたとする、すると此猛獸が如何に我々に危害を加へやうかと一見恐怖と戰慄とを禁ずることが出來ず、小膽なる人にあつては或は昏迷卒倒するかも知れん、然し此猛獸が一幅の畫幀中のものであつて豪宕雄渾の筆神動き魂飛の慨があらば、我々は此猛獸の威容儼然たる有樣に對し一種云ふ可らざる快感を覺える、これが即美である、所謂壯美である、春風駘蕩雲煙霞彩の裏濃艶なる春色の融々たるものに對する溫和の美と、美と云ふ語の上からみれば何の變はることはない。

■亦美的嗜好なるものは必ずしも同等同樣でない、自己の見地經驗嗜好等によつて變化し移動し暢達するのである、故に昨日美としたるも今日否定し甲者の以て美とするものも乙者の以て美とせざるものもある。

■故に絕對的に美なるものに標準は立つることは出來ぬ、今甲者と乙者と共に一の物をみて共に美なり

とするは即二者の美的標準が恰かも一致したのである、又大體の美不美は時に標準を立つることが出來るけれども到底明にこうと決定することは出來ぬ、亦決定する必要もない。

■故に美的標準は程度問題である、吾輩をして云はしむれば比較的智力ある最も經驗ある人の判斷を以て此標準を立てんとするのである、これより得たる標準を以て假りに首肯してゐなくてはなるまい。

■是によつて見ても藝術家なるものは積極的修養を積は勿論なれども須らく高い頭、高い人格によつて作らなくてはならぬことが分る、到底目や手の先の技能を以て立派な藝術的作品を作出することは六か敷い、藝術家にならうとする人は三省すべきことである。

■茲に不可思議なるあるものがある、天才といふものである、これは人力によつて如何ともすることが出來ぬ、吾人が生れながらにして稟け得たる處の先天的才能である、何に携はる人でも多少此の天才は有してゐるが、ある程度迄同等の修養を積んだものでも天才の多くを有して居るものは一方に卓絕したるあるものを作ることである、無論天才にのみ依賴して得たりとするは大に謬れるものであるけれども、特に藝術家には半面此天才の力をまたなくてはならぬ。

■我々は專問の藝術家としては飽くまでも天才を渴迎するものである。

■今藝術家にならんとするものは自身の天才も犧牲とする迄獻身的の勇氣を斯道の爲めに盡さなくてはならぬ、天才に際限はない、つまり自己の天才も恃みとすることは出來ぬ。

■然し天才なきものは藝術に携はる勿れとは決して云はぬ、必ずしも專門の技術家にならなくとも此程高い貴い趣味を解して高潔なる慰安を得やうとするは實に人格といふ上からみても大ゐに督勵すべきことである。

■或は人生の究竟が人格といふものにあるとしてみても藝術は全き人格に接觸する處の唯一の手段であると云ふことが出來やう。（追つて續出すべし）

とするは即二者の美的標準が恰かも一致したのである、又大體の美不美は時に標準を立つることが出來るけれども到底明にこうと決定することは出來ぬ、亦決定する必要もない。

■故に美的標準は程度問題である、吾輩をして云はしむれば比較的智力ある最も經驗ある人の判斷を以て此標準を立てんとするのである、これより得たる標準を以て假りに首肯してゐなくてはなるまい。

■是によつて見ても藝術家なるものは積極的修養を積は勿論なれども須らく高い頭、高い人格によつて作らなくてはならぬことが分る、到底目や手の先の技能を以て立派な藝術的作品を作出することは六かしい、藝術家にならうとする人は三省すべきことである。

■茲に不可思議なるあるものがある、天才といふものである、これは人力によつて如何ともすることが出來ぬ、吾人が生れながらにして稟け得たる處の先天的才能である、何に携はる人でも多少此の天才は有してゐるが、ある程度迄同等の修養を積んだものでも天才の多くを有して居るものは一方に卓絶したるあるものを作ることである、無論天才にのみ依賴して得たりとするは大に謬れるものであるけれども、特に藝術家には半面此天才の力をまたなくてはならぬ。

■我々は專門の藝術家としては飽くまでも天才を渇迎するものである。

■今藝術家にならんとするものは自身の天才も犧牲とする迄獻身的の勇氣を斯道の爲めに盡さなくてはならぬ、天才に際限はない、つまり自己の天才も恃みとすることは出來ぬ。

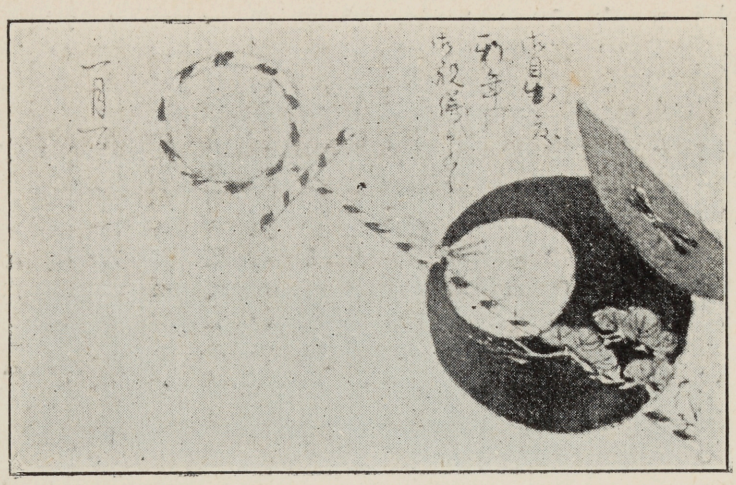
■然し天才なきものは藝術に携はる勿れとは決して云はぬ、必ずしも專門の技術家にならなくとも此程高い貴い趣味を解して高潔なる慰安を得やうとするは實に人格といふ上からみても大ぬに督勵すべきことである。

■或は人生の究竟が人格といふものにあるとしてみても藝術は全き人格に接觸する處の唯一の手段であると云ふことが出來やう。（追つて續出すべし）

松風

汀鷗

▲一月三日、龍華寺へ往つた、風は強く吹いたが天氣は極めてよく、碧空に片雲なく、富嶽は裾野迄も鮮やかに現はれてゐた、アルフレッド、パルソンス氏のNOTE IN JAPANには此處から寫した富士の水彩畫がある。



三條千代子氏

▲これにつき思ひ出した話がある、今から凡そ十年程前こゝに遊びに來たとき、寺の老女にパルソン氏の事を聞いて見た、『アノ異人さんは清水から俥で來てこゝに半日ばかり居て富士山を寫して往ました、密柑を上げたら私し國にもあると申してゞした、是迄こゝへ來て富士山を寫した人は隨分澤山ありますが、あの異人のやうに上手な人は一人もありません、その後も幾人も見えましたが、皆あの異人よりは下手です、私し等毎日富士山を見てゐますが、ホントの富士山よりはアノ繪の方が立派なやうに思はれました』と。

▲よき繪は鑑識あり教育ある人に賞せらるゝと同時に、修養も趣味もなき山樵賤の女にも解られねばならぬ、この山寺の一老婦をして、五年後の今日迄も、其繪を忘れしめぬパルソンス氏の筆力は、尊敬すべきものであると、余は當時深く感じたのであつた。

鵜澤四丁氏

▲龍華寺は富士の名所であるが、麓は夾ば以上蒲原邊の山に掩はれてゐるし、三保の半島も形がわるく、清水邊に見ゆる赤煉瓦の烟突も殺風景で、アタリがゴチヤ〳〵してゐて面白くない。富士を見るにはこゝから一里先の駒越の萬象寺がよい。

▲故高山博士の墓標には、新しい名刺が二三葉挿んであつた。

▲一月五日、横磯の波打際で、有渡山を遠景に亂礁を全景として寫生をしてゐた、近くに遊んでゐた子供達が澤山集まる、男の兒は先から見てゐた女の兒を突き倒して見るのによき位置を奪ひとる、女には生れたくないものだと思つた。『ヤーンマイなー』と一人が褒める、『上手だなー』と他の一人が雷同する、『デモホントの畫かきはモットンマイゼ』と小さな聲で言ふものがある、他人が右といへば左といつて見たい人は何處にでも居るものである。

▲一月六日、興津川の傍の松原の中で愛鷹山の方を寫生した時、一人の紳士が久しく後に立つて見てゐた、そのいち繪のことをいろ〳〵きいて、さてつく〴〵羨ましそうな口調で『私も繪が畫けたら』といふた。

▲この紳士は、先頃から少しく身體の工合がわるく、この地に遊びに來てゐるので、知らぬ土地とて話相手もなく、持つて來た書物もよみ盡し、今は退屈でく〳〵で耐えられぬとの事である、余も『此人に繪が描けたら』と思はざるを得なかつた。

▲一月九日、朝陽館を出で清水の阜頭から三保迄船へ乘つた、御穗神社に一番近い船着場までとの約束で船は買切りである。親方は船頭を招んで砂の上に指で鳥居の形をかいて見せた、この船頭は聾である。

▲三保で寫生をして歸りに駒越の萬象寺へ寄つた、この寺には十年前に二ヶ月程居たことがある、そのころ三宅君も一二週間こゝで寫生をした。此處は富士を見るに一番よい處である、清水邊からでは左の方が隱れるが此處からは蒲原の山も低く見えて、右も左も裾野を現はし形が甚だよい、鈴川岩淵邊では近過ぎるし、燒津川崎邊では遠過る此處は距離に於ても最もよい處である、龍華寺より久能山へゆく近道であるから、この邊に遊ぶものは是非立寄つて澁茶の御馳走になつたらよからう。

▲久し振だといふので終に寺に一泊することになつた、興津では朝な〳〵一番鷄の聲に夢を破られ、清水では隣室の惡い慰みに終夜苦しめられたが、心から親切な待遇と山寺の靜閑とは、此夜をして安らけく眠らしめた

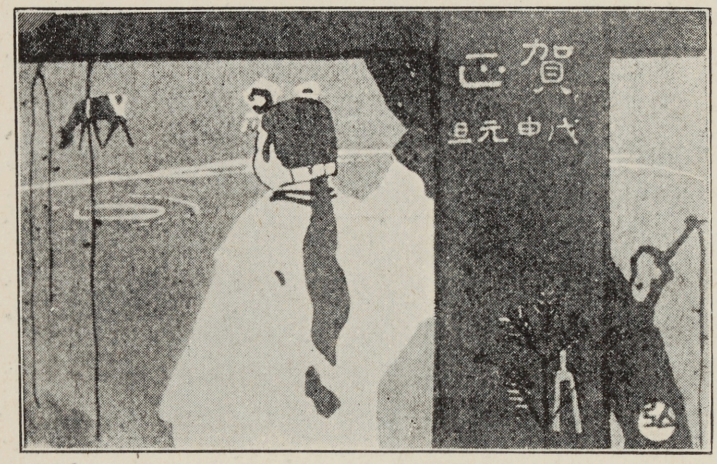
（終）

栗山清太郎氏

ピーター、デ、ウイント、〔三〕

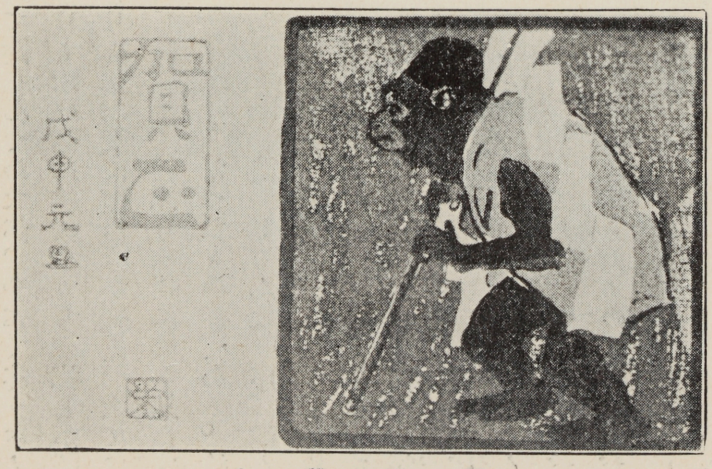
青人

殆ど一年の後、即ち一八〇六年に、ジエー、アール、スミスと徒第の身分を解きぬ。ヒルトンは如何なる關係なりしや知るを得ざれども、デ、ウイントは單に約定の解除に過きざりき。約定の期限に達してより、猶向ふ四年間師に仕ふることゝなりつゝありしかば、スミスは自が爲めに油繪の風景畫十八枚を描かんには、法律上の權利を放棄すべしと云ことを言出ぬ。十八枚の畫は一年九枚の割合にて二年を要することなれば、最初の十二ヶ月に次の如き大いさの繪畫九枚を仕上げぬ。十一吋の九吋、六枚、一呎三吋半の一呎半、二枚、一呎三吋半の一呎半吋、一枚となりき。こゝにてデ、ウイントはスミスの條件を承諾しぬ。畫も正しく得出來きたれば師も心よくうけがひぬ。スミスがデ、ウイントの人爲りを知れることこれにても明白なりける。



中澤弘光氏

こゝに挿話を掲げしは二箇の理由あり、話の簡短なること其一なり。又デウイントが油繪畫家となりし楷梯を知るに便なる其二なり。此の事實を世人往々にして忘れつゝあるなり。デ、ウイントが油繪を初めたるは、其晩年なりしてふことの永く假定せられければ、此誤認より氏が若年の筆を氏の作品として承認せられざりき。デ、ウイントが



岡野榮氏

若年の頃に油繪を停めたる理由は恐らく三あるべし。第一は水彩畫を賣るは尙早かりしなるべく、第二は氏か仕事を爲すことの冷淡にて、宛ら事務を執るの風ありしこと、第三は友人のヒルトンが高尙なる美術を好み、アカデミツクの榮譽を得んがために苦みて、可なりの悲境に陷入りしを實見し確信したりければなり。

竹に就て　河合新藏

余が竹に趣味を持つて來たのは研究を始めてからである、余が研究を始めたのは今より十數年前で、最初の二三年は思ふ如くに描けた、それより漸々無圖かしくなつて、この兩三年は途中で筆を捨てた事もあつた。研究を始めた二三年の意の如く描けたことを今更の樣に考へて見ると、その當時は形態と色とを寫生して居つたのであつた、それからのちは感じを描き現はす研究であつた、形と色とを描く實物寫生、之を學ぶにこれまでは樂で容易に進むことが出來るが、これ丈では畫にならぬ、感じを現はすといふのが畫の生命で、この生命ある畫を作るといふのは生涯の研究であるといふ事を悟つたのである（長野新聞）

石井柏亭氏

□　□　□

盆栽を愛翫する人あり、初めは草花の美はしきを愛し、緣日にて紅や黃や紫や目の醒むるやうなものを澤山買つて喜び、又は根を分け種子を蒔いて樂しんでゐたが、やがて其ケバ〳〵しき色に飽きて、草花よりも木の花に趣味をもち、梅とか藤とかいふてゐるうち、花よりも其結實に面白味を覺え、次では葉の色枝ぶり木振に美を見出すやうになつたとの話である。繪畫の鑑賞力もこんな順序に進んで行くので、最初は華々しき色彩のものを美しと見るのであるが、段々目が肥えて來ると、澁い繪に眞の面白味を感ずるのである。しかしこれも極端にゆくと下手な文人畫のやうに、何だか譯のわからぬものを、オツだとか妙だとかいふて喜ぶやうになつては困る、丁度枝振にも本ぶりにも飽きて、根が面白いといふやうなものである。

○終日畫き終夜讀書する程の畫家にあらざれば平凡に終るべし　ロムニー

ふみがら

T　O　生

BUFFARO. SOCIETY. OF ARTISTS には會長R.C.COXE氏のナイヤガラ瀑布を描ける大なる油繪がある。非凡の作とは思はれないが、この繪のために精選したる彩料を遠く巴里から取よせ、それのみに六百弗も費したとの事であるから、繪に注意の届いてゐるのには感服する。一體氏は油繪よりもエツチングの方が得意のやうに思はれる。BUFFARO ART GALLERY. は、美術會と同じく圖書館の樓上にあつて、規模小に陳列の繪畫もさまで多からず、大作と思はるゝものも少しはあるが、何分カタロツグの用意すらなく、其上室内暗くして筆者の名前さへ讀めず、彫刻もまた指を折る程しか飾つてない。最も此地の富豪 ALBRIGHT 氏が壹百萬弗を投じていま市の公園地に畫堂を建築中で、この夏落成の上は移轉して更に多くの新畫をも加へるとのことである。新畫堂の位置は、廣さ約千エークル車道十七哩といふ大公園の西部、小高き丘の上で美しい湖水を前にした景勝の地である。建築の樣式は希臘風で、四方には大理石の巨柱を廻らし、其尤も大なるものは長さ三丈にあまり重量十六噸以上もある、内部は幾區劃にか分たれ、光線其他の設備は極めて行屆たもので、階下は不殘、美術學校の用に供せられてある。石も磨かれ内部も整ひ、幾多新古の名畫が陳列せられた曉はさだめて壯大の觀を呈することであらう。バフワローのやうな小さな市には、實に惜しいやうな氣がする、歐米ではたゞ一人にてこのやうな大畫堂を作つて寄附する人もあり、又先祖傳來の繪畫彫刻の美術品を、一個人で私することなく惜氣もなくかゝる畫堂に寄贈する人も澤山あるので、自然に美術趣味も發達し進歩してゆくのである、吾國でも少しくこの眞似をして貰いたものである。

此階下の美術學校は、既に授業を始めてゐる。生徒の製作に中々侮り難いものが澤山ある、參考品には世に得難きものも少なくない、生徒はいま二百二三十人居るそうで、月謝は隨分高いが、朝から夜迄種々の組に分れていつ往つても勉强の出來るやうな仕組になつてゐる。

此市の TRINITYCHARCH に JOHN LAFARGE のグラスモザイクがある、氏は米國の人で、グラスモザイクに有名であるが、水彩畫もまた面白い。此會堂の中にも氏の作が澤山あるが、そのうちで教神の意を寓した人物畫は、曾て佛蘭西政府から望まれたとのことで、さすがに立派に見受けられた。他の諸作も敬服すべきものばかりであつた。

美術會の卓上には澤山の美術雜誌がある、そのうちで一寸面白そうなものを少し紹介しやう。

THE ART INTERCHANGE—NEW YORK

小なる繪が澤山ある。

L. ART PRATIQUE—MUNICH

獨文で、數枚の寫眞版が挿んである。

THE STUDIO—LONDON

三四葉の原色版と澤山の小畫あり一般美術に渉りて趣味廣く比較的廉價なり。

L' ART D'DCORATIF—PARIS

佛文粧飾美術を主とする大なる雜誌

GAZETTE

佛文にて着色畫一枚あり面白そうな雜誌

THE MAGAZINE OF ART—LONDON

立派な挿繪多く高尚なり

BRUSH AND PENCIL—CHICAGO

記事も豐富にしてアメリカ出版の雜誌としては上等の部なり、

THE ARTIST—LONDON

二三の彩色畫あり、よき雜誌なれどスタヂオよりは劣るやうなり。

COCORICC—PARIS

頗るハイカラの突飛な繪畫や圖案多し、但廢刊したとの噂あり

THE BROCHURE—BOSTON

建築及彫刻の記事多し

REVUE ILLUSTREE—PARIS

小畫澤山あり、批評專門の雜誌にして讀めたら有益ならん

其他露國、西班牙、伊太利等幾多の美術雜誌があるが、よくもわからず外見丈けではこれぞといふ程のものは見當らぬ（三十六年三月五日北米バフワローより）

△　△　△

子爵秋元興朝氏曰く、日本の名畫と西洋の名畫とを同じ處に對比して、自分を欺くことなく虛心平氣に其時の感じを表白して見たなら其優劣は直ぐに決せられる、日本畫固有の特色を維持してゆかうとすれば不條理な繪を甘じなければならぬ、處がそれは時代が許さぬ、さればとて折衷は思ふ程の成功を期し難い、されば何も迷ふことはいらぬ、一躍して洋畫に入るの外はないと思ふ、洋畫に據つて入神の技に達する、日本將來繪畫の發展の道は此外に出でぬと私は信じてゐる云々（太陽）

△　△　△

雲の組織を正確に驗するには、雲そのものを直接に眺めずして黑き鏡に映りたるその像を見るとよい、此法を用ふるときは、太陽の方位にある薄き雲も充分に視察が出來るし、太陽の像すら不愉快なしに眺むることが出來ると氣象集志にあり、吾々が雲を研究する上にも此方法は便利なるべく、鏡は畫學用の調子鏡を其儘用ふることを得べし。

○人と異つた事をやらうといふには、元來規則で束縛したり、自分の腦力を使ふ方法を敎へずに、他人の手腕、他人の頭腦から出た製作を、無暗と寫させたり、其人の性質、嗜好、目的に頓着なく、誰も彼も同じ機械で製造しやうといふやうな古流の畫學校に近寄らぬやうにせぬはならぬ。（名家訓言）

通信

米澤より

小生常に郊外寫生に趣くおりは何時も「自然は吾等を要求する夫れ何んぞ甚しきや」と言ふ感念が起り申候
而して自然に對し筆取る折りは自然あつて吾れなきが如き心持ちのせられ候されば背後に人の來れるを知らず執筆せるは幾何度此際に成りし畫は吾れながら上出來と感ぜられ候若しも執筆中野心欲心耻心の生じたる折りは其畫亦何んとなくいやみの生じおるを覺え申候
畫なりて見れば「何んぞ其色彩の少なきや」と嘲笑せらるゝが如く思はれて自然を見るの眼の幼なきを悟り申候、斯くなれば家路につくも自然の色彩の變化につき如何にすれば現はす事を得るならんとの煩悶は念頭を去らず再往を促す次第にて候、一度畫等をとり繪具をパレツト上に出したる折りには自然の色を見て繪具を見ず只自然に從はんとつとめおり候されど自然を信ずる淺き爲か色彩に豐富なるを得ず實に吾れながら信仰の淺きを遺憾に思ひ居り候
自然美觀！之れ小生の胸中を去る能はざる所の一種の塊心なれども眼低く手腕上らざるを如何せんさればなり終生身を之れが發揚にゆだね心眼手腕を益々向上的に進めんと決心致し候之れ小生が寫生を實行してつく〳〵と繰り返し〳〵思ひ出さるゝものにて候今年の春は花の都へと雪より出でゝ一筋に此の道を學はんと存じ候へば先生幸ひに指導の勞を取られん事を偏へに願上候而して小生は水彩畫研究所に入らん存念にて候

川島 穎正

＊　＊　＊　＊　＊

熊本より

寒氣漸日に相加はり候處
先生には愈々御清榮奉大賀候
扨て新たに一石一草より研究を始めし次第は前便申上置きし處其後着々倦まず困難に逢ふごとに（寫生上の）講習會の折のかれこれ思ひ合せなどして進歩は實に蝸牛のそれにも如かず候へ共課程のみは漸次上進せしめ十一月に入りては景色畫の稽古も初め申候何れも甚だ澁晦汚濁を極め居處我ながら愛憎盡きる次第に御座候へ共先生の曾て「寫生畫は眞ッ黑くなつても構はぬ」と仰さられし御言葉を楯と致し候忠實に自然に從ひつゝあらば他日奇麗に仕上ぐるを可得と存じ候
尙近ごろの日の短かきには弱り申候小生は目下醫院の調劑事務を執り居り候處田舍の事とて平均午後一時迄はかゝり申候間自其食事を濟まして寫生道具を擔ぎ出づるにて候へば日毎に日沒の早きを恨み申候時々事務の緩なるときは朝食前にも走り出て候へ共いかばかりも出來不申候されど墨繪の修養の甚だ緊要なるを感じ來り候に付夜間は鉛筆擦筆に親しみ、用器畫も日出前と夜間にのみ限り居申候　尙夜間人物寫生（木炭にて）を試みんかと存候處如何の方法によるべきやみづゑ紙上にて御洩らし被下らば幸甚

益承次一郎

編者曰く　木炭畫は木炭用紙をカルトン（厚きボール紙にてよろし）に挿みて鉛筆畫の如く輪廓をとり極大體の明暗を分ち漸次細部に進みゆくのである通常石膏の顏一つ描くに三四時間宛六日間位ひはかゝります。

寄書

余が水彩の畫初め

本多金藏

新年となつたが、一日は四方拜二日三日は同窓會で一枚も寫生は出來なかつた。

四日となつて今日こそやつて見樣と思つて九時頃出かけた雪はまだ溶けないてごくよい景色だがいくら歩いても場所が見附からない、雪は溶け始まる、氣はあせる、止むを得ず田甫を前にひかえ遠く芙蓉峯を望んで三脚を据へた。

漸く輪廓だけ畫ききると、こそこそ風がふいて來て寒いの寒いの、危く鼻の水で畫面を汚しはぐつた、それで畫き上げて見たところが見ん事失敗、最も場所も惡かつた、それから歸りがけに近道をしやうと思つて田の畔に出たところが、雪はもう半ば溶けたので下駄の齒へくつつく、畔だから歩きにくい、手を上げたり足をあげたり與次郎兵衞宜敷といふお姿で歩きだした、後の方で誰か笑つて居たらしい、それもよいか泣き面に蜂下駄の鼻緒をふんぎつた仕方がないぴつこひきひき家に歸つたが、いまいましいのでその雪のどつさりついた下駄を寫生した、これも立派な失敗、嗚呼新年早々しかも畫初めに失敗するとは不愉快此上なしだ、しかし失敗は成功の基といふからあながち落膽するには及ぶまいとあきらめた、この先畫くのはどうであるか。

予が淺き意見

中村利一

私は只今小學校に教鞭を執つて居るものですが小學校では水彩畫が教科書になつてありませんので大に閉口して居ります、否寧ろなげかはしいのです。

水彩畫は小學校では教へ得られぬ六ヶ敷いものとしてあるのか又水彩畫は小學校では教へる必要のないものと思はれてあるのか、それとも當局者が水彩畫の味を知らないのか、どちらにしても不合點の至りだ。

水彩畫も毛筆畫も同じ繪畫だ、然も同じ程度のものではないかと思ふ、今の小學校の教科書には始めから毛筆であるが、之も最初は鉛筆から始めて漸次毛筆又は水彩に進むようにするのが得た策ではあるまいか？

水彩畫は小學校で教得へられぬ六ヶ敷いものでも不必要なものでもないと思ふ……

で予は敢て水彩畫界の諸彦に懇篤なる御批評を仰ぎ度い次第であるのです。

新入會者廣告

長野縣上田町四七一　坂井寛美

出雲國八束郡川津村　久保田甲一

和歌山縣師範學校　保田虎太郎

茨城縣土浦中學校第二假寄宿舍　永瀨義郎

千葉縣木下町　吉岡孝太郎

東京府西多摩郡熊川村　森田浩一

埼玉縣比企郡大河村　小高甚吾

二月　日本水彩畫會

啞倶樂會

新潟　晴帆生

此間海老名牧師が當地に於ての演說の中に、北越の人は冬の數ケ月間は熊的生活をするもの蛇と極言されたが、それかあらぬか古來北越人士の一般的趣味は兎角座敷にのみ限られたかの樣……隨て唯珍しい什器を集めて自ら樂むとか、美事なる書畫類を展觀して人に誇るといふ樣の事が專ら行はれて居たのが、今以て盛である事は骨董屋が在の旦那廻りを喜ぶ事や、ヘッポコ畫工が越後路へ入てから樂になつたと述懷するのでも大方推想し得らるゝ事と思ふのです、それで誰々の椿山とか某々の大雅堂とかといふのが著しく勢力を彼等の間に振るつて居るので、唯もう數の多きを得たりとし名のよいのを以つて誇とするといふ風、それで數さへ多ければよいか、名さへよければ宜いかといへば强ちにそうでもない、特に文人畫風言換ふれば漢畫の南宗といふ風が專ら推奬されて居つた、それに續ての北宗も上では雪舟とか元信とか下では文晁邊が最も珍重されて居つた、現に多くの藏幅家の門を叩けば示さるるもの殆ど夫等のものに限るといつてもよい位、夫は明治に入つてから文人畫が一と仕切り非常に流行した事の時勢も加つてありませうが、何分昔から其方の盛な事は古來當地方出の名家と擧げられたる人達が殆ど夫等の派に限られて居つたのでも知る事が出來ませう、如此有樣から自然に氣韻といふ事を第一義として、極端に之にかぶれて、其他の事は深く顧みないといふ樣の狀態で、煮ヌキ饂飩を列べた樣の皺とかツクヂ芋を連れた如き皺でなければ高尙なる風韻は、求められないものの樣に思込まれて居つたのです、夫ですから、比較的形態や色彩などの方面にも力を入れた所の圓山其他の流派の者は深く味ふに足らぬ位に思はれて卑められて居つたといふ譯、まして好尙の頗る異つた洋畫を見てフムよいなあ寫眞かといつたきりで再び顧みない樣なのも無理はないのです、併ながら時勢の潮流今何時迄もかくあるを許さないのは自明の理で、交通がよく開けてから此方彼等の好尙も追々變て來たのです、一方漢畫がかく持て囃さるゝと共に新美術（美術院流風をかくいる得べくんば）なども歡迎さるゝに至つたといふ風に……夫で洋畫の方でも未だ微々たるものですが、此潮流に順ふて少宛乍ら發展はして居ります、所に依つては五六の同勢で研究して居るのをポッポッ見受くるのですが、當地には吾々如き少部分を除ては之を遣つてる人を見受けません、唯中學と師範の生徒とが各會を立てゝ斯道を鼓吹してるのみです、中學の方では其立雲會年々の展覽會に幾多の其校出身の美術學生が大なる後援を與へ美しき光彩を添えて居りますが、寫生も中々遣つて居つて隨分元氣がある、師範のは啞倶樂會といつて近來は目つ切り盛になつて在校生のみで大に振て居る、元來此會は此邊の人がワットマン紙木炭紙はおろか水彩繪具さへ知らなかッた六七年前既に呱々の聲を擧げたもので、一盛一衰はあつたが兎に角當地で斯道の先鞭をつけて各所の教育展覽會に其抱負を示して居つたのです、夫で年々同じ樣の體裁の臨畫のみを繰返すといふ風であつたのが、昨年頃からは餘程變つて著しく寫生

風に傾いて來て居る、時世とはいへ之は眞に喜しい現象で一層此機運を助成しもたいのです、此間其展覽會を遣つたのですが中々盛況で相應に滿足の結果を得たと思ふのです、墨繪も中々奬勵したのですが、先づ六七十點中にも數葉の全紙への鉛筆畫及び多くの木炭畫などは大に振つて居たです、水彩畫は特に多かつたので、三百余點中にて中々見るべきものも、少くはなかつたのです、遣口は一寸天才的學生が天才に任せてなぐり付けたといふ樣に見えたのも少くはなかつたけれども、臨畫の方は概して沈着して稍活氣のある、色を例に依てアツサリした使ひ振りであるから神秘的深甚なる感想を與へないが、一寸誰にても好かれさうで心持のよささうに見受けらるゝが、ともすると深みを缺いた薄いものになるのは殊に惜しと思ふたのです、其他多くの平常成績は大に發育的價値を發揮した譯で、心ある人の着目する所となつたのです、又手工科製作品の併列は一寸目先の變れる所から一ト際人目を喜ばせました、何分地は高燥なり日は兩日に涉て好晴と來て居るのですから、來觀者甚多く近來にない盛會であつて豫想外の成功でした、僅の事ですが運動會の色々の運動を模樣化したのなどは著しく小學生徒等の興味を呼起して實に面白い事でした。

兎に角平常他校に比しては時間も多く又年中色々の會に攻め立てられて居るに係はらず如此成功を博し得た事は大に多とすべき事です、殊に學校の性質上始中終教育に結び付くるといふ事には出來得る丈け注意を拂ふたのでした、且つ又此等の機會を利用して出來得る丈け生徒の自發的觀念を養はしむるといふ寸法で、殆ど會の始終を彼等をして處置せしめたのですが、至極敏活に申分なく處置されて實に結構の事でした。要之此度の會も慥に良き影響を一般に與へ得たと思はるゝのですから、之が追々發展して一般の好尙に結び付くといふ事も想像し得らるるので、それが近くはないかも知れませんが又遠い將來の事でもなからふと信ずるのです。

（四十年十二月末稿）

朝の寫生

K T 生

午前五時といふに、繪具箱、ブロック抱へて森に入る。日は未だ出でず、自然はおぼろ〳〵の夢に似たり。空は希望に滿てる薔薇色の笑を洩し、霧は草をおおひ、樹に罩めて、偉大なる中景の樹、色彩いよ〳〵柔かに趣益々深く今や萬物は、今日一日の初めの、汚れなき美と、神聖とを歌へり。柔草の茂れる所、露しきりにこぼれ、冷風軟かに畫布をかすむ、

瞬時！我は汚れたる我にあらずして、美しき自然の讃美者なりき。

みどり洋畫會

◎創立明治四十一年一月一日◎事務所横濱市尾上町三丁目四十番地島内みどり洋畫會◎目的としては毎年二回展覽會及び毎月一回畫葉書順送批評會を催ふし其他に研究材料品を備へて會員に貸與し專ら會員相互の洋畫に關する思想及び技術の發達を圖る◎機關雜誌『みどり』を毎年四回發行して會員に配付す◎會員は東京、横濱、地方に居住する同好有志にて皆青年なり學事の餘暇或は專門にして研究する者等にて現在の處二十四名を有す尙ほ昨今募集中なり右大略を御報告申上候

みどり洋畫會幹事代理　北山清太郎（通信）

□本號の口繪は故淺井忠氏の巴里遊學中寫生せられしもの、圖はOW四ッ切大にして滿谷國四郎氏の所藏に御座候

□淺井氏は吾邦洋畫界一方の雄としてその發展に大に力を盡されしと同時に、世人が水彩畫なるものを知らざりし三十年以前に於て屢々其輕妙の筆を振はれたることある由にて、いはば水彩畫の鼻祖とも可申候、殊に近年關西地方に洋畫の趣味を普及せられ將來極めて有望なりしに一朝易簀せられしは惜むべき限りに候

□丸山晩霞氏は只今小笠原島にて寫生に餘念なきことゝ存候、同氏は多年の目的たる綠の研究のほかに、同地の風俗其他にも充分の觀察を齎らし歸らるゝ筈に付、歸京の上は南洋美觀を主題として「みづゑ」特別號を出すべく計畫に御座候

□本誌の發展については、種々相談の結果特別讀者を募る事に致候、詳しくは廣告欄にあり、苟も斯道に趣味を有し且本誌に御同情ある諸君は奮て御贊成御申込下されたく候

近時雜聞

△日本水彩畫會研究町にては舊臘盛んなる忘年會を催したるが、去月二十六日更に新年會を催ほし、講習所時代の人々も參會して極めて盛會なりし。

△丸山晩霞氏は一月十日兵庫丸にて小笠原島へ寫生旅行を試みられたり、同行者は研究所々員志賀正人、松山忠三兩氏にして歸京の時日は未定なりと

△太平洋畫會展覽會は上野公園二號館南部にて五月十五日より六月十三日迄開會の筈

紹介

◎漫畫天地　小杉未醒著

京橋區木挽町四丁目　佐久良書房

四六判美粧　定價九十錢

未醒氏漫畫の妙は今更言ふも野暮なり、收むる處二百圖、皆一度世に出しものとはきけど幾度繰返し見ても飽く事を知らず、此種の筆は所謂天才に待つ處多く、常人のよく模倣し能はざるものなれど、漫畫に趣味を有し毛筆線畫を學ばんとする人には最もよき參考書なるべし。瓊音、櫻巷、萍水、烏水、銀月、政女、紅蓮洞、思水、孤雁、嶺雲、獨歩、葉舟、うつぼ、等文壇名家の畫に題せる小品文皆大に誦すべし

◎方寸　美術雜誌も多く世に出でぬるが方寸程商賣氣のない雜誌は他にはあるまい挿繪の選擇もよく版の樣式をいろ〳〵試みたのもよく記事にはまゝ樂屋落もあるが思ふことを直言して憚らぬ態度は大に快よい殊に秋季展覽會號の阪本氏の固理窟は近來の好文字であつた

◎寫眞雜誌無名艸　第一號

寫眞專門家の會合なる無名會の機關雜誌にして、美はしき畫五葉を挿めり、裝釘も印刷も用紙もコッたものにて、寫眞雜誌中の白眉といふべし（二十五錢、京橋區築地二丁目無名會本部發行）

◎美術評論　第一號

繪畫鑑賞法の著者梅澤和軒氏の主宰する美術雜誌にして文藝方面にも及び趣味極めて饒なるは喜ふべし（毎月一回、一部七錢、芝區兼房町美術評論社發行）

問に答ふ

■一　友人と共に同じ臨本で鉛筆の稽古を始めましたが僕は友人よりは丁寧なれど出來榮遲し、粗末にても澤山畫く方よろしきや二　簡易透視畫法は何日頃出來るにや三　色鉛筆は色彩に益する處ありや其効用を知りたし（京橋KT生）◎一　作畫の迅速はスケツチなどの場合に必要のなれど臨本の稽古などには遲くとも其臨本と少しも異ならぬやう忠實に畫く方よし二　著者多忙のため發行期未定三　あまり大きな利益なし■カツサン鉛筆臨本は何册なりや（兵庫MY生）◎六十一册と覺ゆ拔賣はせず、序に丸善には英文の目錄もあり■山岳の發行期日を問ふ（福島四眼）◎毎年三月六月十月の三回と覺ゆ、序に三條氏の事は書狀にて問合はされよ■一　石井柏亭氏は日本畫も描くにや二　雜誌と新聞とは挿繪に相異ありといふは如何三　霧鷗生とは何人か四　製版師も美術家と云ふ資格ありや五　白馬の神苑と穗高山の麓の大いさ六　ALBUM水彩畫紙とは如何なる紙質にや、色が滲み込むことなきや（小樽のぼる生）◎一　然り二　日本現時の有樣にては相異を見ざれど同一の考を以て畫くべきものにあらず理由は種々あり短文にては說きがたし三　書狀にて問合されよ四　美術家といふことを得ず五　前者はワツトマン全紙、後者はOW全紙六　未だ使用して見ず■一　私は今普通學修學中なるが日本水彩畫會研究所に入學し得べきや二　日本風俗史、世界風俗史、美學及美術史、世界及近世美術史等はドノ位の學力にて讀み得べきや（山田生）◎一　入學に差支なし二　讀むだけなら高等小學卒業位ひでも讀めるが理解するにはもう少し高い學問がいる

讀者の領分

■「みづゑ」の號を追ふて發展するを喜ぶ、此際尙一層記事を豐富にし且原色版二枚、石版木版各一枚を挿入せられては如何、價は倍加するも可なり（福島四眼）◎特別讀者を多數を勸誘されたし、さすれば其の理想に近きものを得べし■諸君のうち「日本名勝寫生紀行」「平旦」「山岳」「光風」等御所持の方にして御不用のものあらば相當代價にて讓受けたし、希望の方は概め御一報ありたし（大阪東區東平野町五ノ一八五、福島四眼）■品質の如何は知らぬが定價表の上では文房堂よりも京都の森親子商會の方が繪具などに廉價なものがある、そして營業のやり方も森商會の方が親切である（のぼる生）■「みづゑ」第一を所持す、ワツトマン十六切大スケツチ二枚送るものに進上すべし、後着は余の繪と交換（小樽區手宮裡町十六、佐々木石藏）

日本水彩畫會、春鳥會及び私へ宛て年賀狀を寄せられし諸君に對し一々御答禮可申上の處舊臘より東海道邊旅行致居歸宅後は事務殊に多忙を極め候爲め意を果さず候次第に付あしからず御忍召被下度候

一月　大下藤次郎